

図書館だより

第17巻2号

通巻134号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

カレント・エッセイ②

海よ

斧 泰彦

子供のころ、窓に映る風景はいつも決まって山であった。右手に恵庭岳、左手にドームから煙をたなびかせる樽前山。間に風不死岳がやや手前に覆いかぶさるように控えていた。山の向こうには支笏湖が神秘の色をたたえているに違いないとは分かっていても、もとより姿が見えるわけではない。いつしか奥にあるもの、見えない先にあるものに憧れ、山の彼方に思いを馳せるようになった。

札幌から12時間も列車に揺られ、稚内にたどり着いたのは大学1年の夏であった。途中、車窓から眺めた利尻岳の山容になぜか心がときめく。連なる山並みの中の一秀峰ではない。日本海にどっかりと屹立する雄々しさ。波打ち際から寸分のごまかしもなく始まる山。海拔何メートルという高さが掛値なしに当てはまるどころがいい。

稚内港の波止場を歩いたあと、最北端の宗谷岬まで足を伸ばす。前夜、市内で寒さに震えながら盆踊りを見物したときは打って変わって珍しく気温が上がり、汗ばむほど。岬の灯台からサハリンを見渡したさいには、信じられないくらい波がない。宗谷海峡、まさに鏡の如し。こんなことって、本当にあるのか。大望遠鏡のレンズ越しにサハリン側の人の動きを確かめながら、向こうへ歩いて渡れるかもしれないと思った。歩いて、というのはともかく、地元の人たちから、監視の目をかすめてこっそり対岸のサハリンとの間を行き来している人々のうわさを耳にした。密航するのは、もともと日本統治下の樺太(サハリン)で生まれ育った人が多いという。敗戦でソ連軍に追われ、命からがら引き揚げてきたものの、身寄りはない、仕事も食もない。樺太に残してきた家財道具などが諦め切れぬ。離散した家族、知人たちの消息も知りたい。そこで、ひそかに小舟を仕立て勝手知ったる彼の地に戻る。向こうは向こうでソ連軍の監

視の目が光り、稚内側には西寄りの野寒布岬の背後の丘陵の上にアメリカ軍のレーダー基地がある。

なにぶん、米軍占領下のことではあり、どっちに捕まっても只では済まないだろう。考えただけでスリル満点、背筋がぞくぞくする。

宗谷岬の突端で手頃な平たい小石を拾い、北にむけて海面すれすれに思いっきり投げる。石は鏡のような水面を弾みながら跳んでいく。やったぞ! ここは東西冷戦の世界を象徴する最前線である。目の前は米ソを隔てる宗谷海峡であり、左手に日本海、そして右手に広がるのが今は奪われたオホーツク海なのだ。三つの海を一望できるこの地で、水平線目がけて次々と一石を投じていく。あっさり、ポチャンと沈むこともあろう、時に波紋を広げることがあるかもしれない。可能性にかけてみたい。そんな思いが一瞬、脳裏を駆けめぐる。何もなさそうでも何でもありの海。紫陽花の七変化とは比べものにならないほど数え切れぬ色彩、荒れ狂い怒り立つ海、優しく受け容れてくれる海。底知れぬ深みへの恐怖、限りなくふくらむ想像。気のせいかな、書物に似ていなくもない。そうだ、海をめざせ。

以来、どれほどの海を見たことか。ヨーロッパ大陸最西端のロカ岬で、ドーバー海峡で、アイリッシュ海で、地中海で、エーゲ海で、ボスポラス海峡で、カスピ海で、ペルシャ湾で、インド洋で、東シナ海、南シナ海、渤海、黄海、台湾海峡、バシー海峡、マラッカ海峡、etc., etc.……

横浜、ホンコン、シンガポールでは港の見えるところに住居または事務所を構えた。実は、稚内から利尻・礼文島への往復とも船酔いでダウンしたことを付記しておく。

(おの やすひこ 教養部教授・マスコミ論)

フロントアングル '94

相互利用は第3の道で

— 国立国会図書館志向型 —

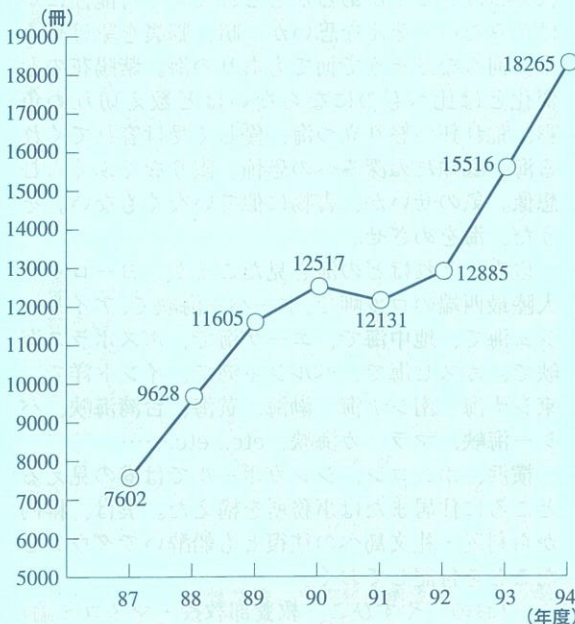
レファレンスの研修会などで、時々議論されるのは複写対象館の問題。ある人は「近くの大学へ」と言えば、他の人は「いや、発行もとへ」と言う。しかし、当館では第3の道があると考え実践している。それは「国立国会図書館志向」である。

なんと言っても国のセンター館だし、所蔵も多い。借用の片道は無料の上、複写料金の送金料が60円と簡便で割安である。

'94年度の参考統計はそれを現していないか。借用した79冊のうち国会は45冊。複写依頼166件のうち国会へは59件。あとは皆それぞれにバラツキがある。複写ではほかに、しばしば日本大学図書館にはお世話になる。

'94年度 相互利用状況 (参考業務統計)

対象館	貸借			複写		
	発	受	計	発	受	計
大学図書館						
A 国公	5	1	6	38	19	57
B 私立	8	28	36	64	106	170
小計	13	29	42	102	125	227
公共図書館						
A 国会	45	—	45	59	—	59
B 道立他	9	3	12	—	8	8
小計	54	3	57	59	8	67
他	—	—	—	1	5	6
外国	12	—	12	4	—	4
計	79	32	111	166	138	304



過去8年間 学生貸出冊数推移

早いもので、'87年の新館オープンから今年で9年目。'94年度では8年目ということになる。

この間に学生の貸出冊数は順調に伸びている。ほぼ2.4倍へ。

学生貸出冊数 8年で2.4倍増

開架図書冊数は初年度の4万冊からほぼ倍増。去年は貸出冊数を2冊から3冊へ。などが影響しているのか。

内容別では専門、教養多彩だが、中でも「公務員試験」の本がよく利用されている。

蔵書冊数の推移

平成7年3月31日現在の蔵書冊数

総計表 (1)+(2)

	和 書	洋 書	合 計
冊 数	397,722冊	136,855冊	534,577冊
和・洋書比率	74.4%	25.6%	100.0%

(1) 年度別受入図書の数表 (過去10年間の推移)

年 度	和 書 (冊)	洋 書 (冊)	合 計 (冊)	昭和60年度を100% としての伸び率 (%)
昭和24年～59年	178,564	75,577	254,141	
60年	13,360	6,560	19,920	100.0
61年	17,841	6,762	24,603	123.5
62年	15,799	5,198	20,997	105.4
63年	19,640	5,400	25,040	125.7
平成元年	20,820	4,500	25,320	127.1
2年	17,680	4,600	22,280	111.8
3年	18,428	6,519	24,947	125.2
4年	23,100	8,540	31,640	158.8
5年	17,080	5,237	22,320	112.0
6年	18,060	6,720	24,780	124.4
合 計	360,372	135,616	495,988	

(2) 文庫等の蔵書数

文庫名	北駕文庫	戸津文庫	上原文庫	小林文庫	卒業論文	修士論文	合 計
和 書	31,113	891	2,765	2,197	310	74	37,350
洋 書	—	58	606	575	—	—	1,239
合 計	31,113	949	3,371	2,772	310	74	38,589

- アメリカの会計原則 1994年版 青山監査法人・プライス
ウォーターハウス編 東洋経済新報社 1994
- アメリカの会計基準 ARB、APB 意見書、FASB 基準書の
解説 山田昭広著 第3版 中央経済社 1994
- 会社経理実務辞典 日本実業出版社編 日本実業出版社
1989
- 国際会計基準ガイドブック 朝日監査法人編 中央経済社
1994
- 企業の社会的責任 J.M. アンダーソン著 百瀬恵夫監訳
白桃書房 1994
- ウェーバー近代への診断 デートレフ・ポイカート編 雀
部幸隆、小野清美訳 名古屋大学出版会 1994
- 価値多元時代と経済学 山田雄三著 岩波書店 1994
- 大企業の所有と支配 市川兼三著 成文堂 1994
- 現代企業の基礎理論 取引コストアプローチ展開 千倉書
房 1994
- 住宅経済の構造変動 欧米6カ国の比較分析 M. ボール
[ほか著] 大泉英次訳 晃洋書房 1994
- 国際分業=外国貿易の基本理論 佐藤秀夫著 創風社
1994
- 講座現代アジア 2 東京大学出版会 1994
2 近代化と構造変動 中兼和津次編
- [大蔵省] 銀行局年報第1次～第51次 複製版 朝倉孝吉
浅井良夫監修・解題 コンパニオン出版 1981
第1次 銀行課報告 明治6 (1873)～12 (1879)
第2～12次 銀行局報告 明治12 (1879)～22 (1904)
第13～29次 銀行営業報告 明治23 (1890)～37 (1904)
- [大蔵省] 銀行局年報第1次～第51次 複製版 第30～39
次 銀行及担保附社債信託事業報告 明治38 (1905)～大
正3 (1914) 第40～51次 銀行局年報 大正4 (1915)
- ～昭和3 (1928)
- 銀行便覧 1-5 複製版 朝倉孝吉 杉山和雄監修・解
題 コンパニオン出版 1972 (財政金融史料集成 2)
明治23 (1890)～大正7 (1918)
- 銀行総覧 1-49(1896-1943)複製版 朝倉孝吉監修 コ
ンパニオン出版 1985 (財政金融史料集成 3) 明治
29 (1896)～昭和18 (1943)
- 日本マーケティング戦略 ガイド&ケース100 「戦略
100」編集委員会編 日本経済新聞社 1993
- 日本の社会福祉思想 吉田久一著 勁草書房 1994
- 再生産と自己変革 新しい社会理論のために 庄司興吉編
法政大学出版局 1994 (叢書現代の社会科学)
- アジアの経済発展と日本型モデル 社会類型論的アプロ
ーチ 長谷川啓之著 文真堂 1994
- 現代生活論の課題 倉野精三編 第一書林 1994
- 日本社会事業の歴史 吉田久一著 1994
- エスノナショナリズムと政治統合 石川一雄著 有信堂高
文社 1994
- 北海道勢要覧 平成6年 北海道開発庁部統計課編
- 北海道工場総覧 1994 北海道商工労働観光部監修 1994
- 目で見る北海道産業 平成6年度版 札幌 通商産業局編
札幌商工協会 1994
- 地域経済要覧 1994 経済企画庁調査局編
- 北海道の特性を生かした産業の展開 北海道型地場産業の
高付加価値化に向けて 北海道産業問題編集会編 1994
- 北海道の都市の現状と展開方向 北海道開発庁北海道都市
問題研究会編 1993
- 地域経済レポート 減速感広がる大都市圏、底固い地方圏
平成6年 経済企画庁調査局著

レーザーディスクで映画観賞を

レーザーディスク・プレイヤー2台が閲覧室3階のA・Vブースに付加増設しました。これにより、ビデオテープとカセットテープに加え、3種類のA・V資料を利用できるようになりました。

レーザーディスクは、映画を中心に約100点程を所蔵しております。2階カウンターに所蔵リストを備えておりますのでお尋ねください。また、設置以来、多くの利用者に親しまれておりますが、館員一同これからもソフトの充実などに努めてまいりますので、大いにご利用ください。

≒主なレーザーディスクのリスト≒

愛と追憶の日々/愛と哀しみのポレロ/秋のソナタ/アンドレイ・ルブリョフ/晩秋/バック・トゥ・ザ・フューチャ 1, 2, 3./ベルリンの熱い壁/ブレードランナー/コクーン1, 2./クリスマスキャロル/誓いの休暇/ダイ・ハード/大草原の小さな家 1-18./E.T/エル・スール/フィールド・オブ・ドリームス/グッドモーニング・ベトナム/ガンジー/ガープの世界/話の話/ヘルプ/インドへの道/石の花/イワン雷帝/JFK/ジュリア/人生案内/カッコウの巣の上で/悲しみよさようなら/キングダートンコッ

ドイツ現代史と国際教科書改善 ポスト国民国家の歴史意識 近藤孝弘著 名古屋大学出版会 1993
 キリスト教の神話伝説 G.エヴリー著 青土社 1994
 東ドイツ・体制崩壊の政治過程 山田徹著 日本評論社 1994 (神奈川大学法学研究叢書 10)
 日本の政策決定過程 対外援助と外圧 ロバート・M. オアア、Jr. 著 東洋経済新法社 1993
 規制緩和と民営化 OECD 編 東洋経済新報社 1993
 土地税制の理論と実証 岩田規久男 [ほか] 著 東洋経済新報社 1993
 法の科学 22(1994) 民主主義科学者協会法律部会編 日本評論社 1994
 情報公開ハンドブック 東京都条例を中心に 第二東京弁護士会編著 新版 花伝社 1994
 情報公開条例の研究 適用除外事例をめぐる答申と裁判例 第二東京弁護士会編集 花伝社 1994
 過失相殺の法理 窪田充見著 有斐閣 1994
 行政マンからみた鉄骨工事の検査 春原匡利著 理工図書 1994
 都市空間の社会理論—ニュー・アーバン・ソシオロジーの射程— 吉原直樹著 東京大学出版甲斐 1994 (社会学シリーズ)
 「世界都市」東京の構造転換 東京リストラクチュアリングの社会学 町村敬志著 1994 (社会学シリーズ)
 総合政策学への招待 加藤寛、中村まづる著 有斐閣 1994
 (判例・法令) 消費者法 大村敦志著 有斐閣 1994
 道路・通路の裁判例 沢井裕 [ほか] 編著 第2版 有斐閣 1991 (生活紛争裁判例シリーズ)
 建築の裁判例 荒井八太郎 [ほか] 編著 有斐閣 1992 (生

活紛争裁判例シリーズ) 東京経済新報社 1994
 世界政治の構造変動 1 坂本義和編 岩波書店 1994
 「嘘ばかり」で七十年 谷沢永一著 講談社 1994
 日本の国から 診断と未来への処方箋 細見卓編著 東洋経済新報社 1994
 21世紀を生きはじめのために 4 村瀬学 [ほか] 著 宝島社 1994 4 喩としての生活
 「家」としての日本社会 三戸公著 有斐閣 1994
 国民国家のエルゴロジー—「共産党宣言」から「民衆の地球宣言」へ— 加藤哲郎著 平凡社 1994 (これからの世界史 9)
 政界再編とキーマンたち 岩見隆夫著 毎日新聞社 1994 (近聞遠見 3)
 日本のフェミニズム 1 井上輝子 [ほか] 編 岩波書店 1994
 近代国民国家の憲法構造 樋口陽一著 東京大学出版会 1994
 近代皇室制度の形成 明治皇室典範のできるまで 島善高著 成文堂 1994 (学際レクチャーシリーズ 13)
 世界人権ハンドブック チャールズ・フマーナ編著 明石書店 1994
 現代ドイツの試練 政治・社会の深層を読む 仲井斌著 岩波書店 1994
 平和を創る教育 平和と人権のための教育学試論 佐貫浩著 新日本出版社 1994
 憲法的思惟 アメリカ憲法における「自然」と「知識」 蟻川恒正著 創文社
 人権と憲法訴訟 声部信喜著 有斐閣 1994
 分権化時代の地方財政 日本地方財政学会編 勁草書房 1994 (日本地方財政学会研究叢書)

プ/心の旅/告発の行方/黒い瞳/機械じかけのピアノのための未完成の戯曲/ラッキー・カフェ/レナードの朝/マイルズ・フロム・ホーム/モスキート・コースト/名探偵ポワロシリーズ 3-5/ネバーエンディングストーリー/2001年宇宙の旅/丘の上のジェーン/オクラホマ/オズの魔法使い/オブローモフの生涯より/俺たちに明日はない/鬼戦車 T-34/ロビンフット/ローラとバイオリン/ライトスタッフ/真実の瞬間/白い恐怖/訴訟/サウンド・オブ・ミュージック/推定無罪/戦艦ポチョムキン/砂の惑星/ストリート・オブ・ファイヤー/ストレンジャー・ザン・パラダイス/サクリフェイス/さらば青春

の光/天使が降りたホームタウン/ツインズ/タクシーグルース/タクシードライバー/鶴は飛んでゆく/旅芸人の世界/わが心のボルチモア/ワーキング・ガール/惑星ソラリス etc. 田紫

“少ない台数、みんなで譲りあいましょう”

映画によっては利用時間規定の2時間を上回るものもあります。この場合、特定の利用者がA・Vブースを占有することとなりますので、他の利用者の申し込み状況によっては、観賞時間を制限することがありますのでよろしくご協力ください。

日本の仏教 1 日本仏教研究会編 法蔵館 1994
 日本語解釈活用辞典 渡辺富美雄 [ほか] ぎょうせい
 1993
 日本語教師トレーニングマニュアル 2 井口厚夫 井口裕子著 バベル・プレス 1994
 2 日本語文法整理読本解説と演習
 中学・高校教師のための教室ディベート入門 佐藤喜久雄 [ほか] 創訳社 1994
 日英比較表現論 榎垣実著 大修館書店 1975
 日英比較語学入門 榎垣実著 大修館書店 1988
 慣用表現辞典 日本語の言い回し 奥山益朗編 東京堂出版 1994
 言語学への招待 中島平三、外池滋生編 大修館書店 1994
 日本語教育ハンドブック 日本語教育学会編 大修館書店 1990
 日本語音声学 天沼寧 [ほか] 著 くろしお出版 1981
 日本語と中国語の対照研究論文集 上 大河原康憲編 くろしお出版 1992
 日本語と中国語の対照研究研究論文集 達成 杉村博文著 中国語副詞“選”と日本語の“決して” 原由起子著
 日本語の談話の構造分析 勧誘のストラテジーの考察 P. ザトラウスキー著 くろしお出版 1994 (日本語研究叢書 5)
 日本文化の起源 民族学と遺伝学の対話 佐々木高明、森島啓子編 講談社 1993
 国語語彙史の研究 14 和泉書院 1994 (山内洋一郎著) (伊牟田経久著) (木村雅則著)
 国語方言の生成と展開 神部宏康 愛宕八郎康隆編 和泉書院 1994 (研究叢書 156 継承と展開 3)

気楽に観賞

『深田久弥の日本百名山』ビデオ全20巻

山と溪谷社

何故か私は朝早く目が覚めてしまう。家族の者はまだ白川夜船、扉の音がガシャッ！ オ一朝刊が来たな。朝刊を取りに行く、紙面を読みつつ静寂過ぎるのでテレビのスイッチを入れた。昨日の音量で真白画面が現れる。出現画面とともにザーと大音響、咄嗟にボリュームを下げチャンネルを変えた。どこのチャンネルも真白毛！ 続けてBSにチャンネルを変えると、山の稜線と心地好い

現代世界と国民国家の将来 田中浩編 御茶の水書房 1990
 トマス・モア N.H.オシノフスキー 御茶の水書房
 経済学の成立 アダム・スミスと近代自然法学 新村聡著 御茶の水書房 1994 (岡山大学経済学研究叢書 第15冊)
 市民社会理論と現代 現代の思想課題と近代思想の再解説 田中正司著 御茶の水書房 1994
 日本中世の流通と対外関係 佐々木銀弥著 吉川弘文館 1994
 百人一首古注抄 島津忠夫、上条彰次編 和泉書院 1982
 異文化理解とコミュニケーション 1 三修社 1994
 ことばと文化 本名信行 [ほか] 編著
 異文化理解とコミュニケーション 2 三修社 1994
 人間と組織 山本正昭 [ほか] 編著
 日英語の対照研究 英語中間副詞と日本語相当詞 ケネス・L. ジャクソン著 大修館書店 1970
 インドネシア—思想の系譜 土屋健治著 勁草書房 1994
 日本の生態学 今西錦司とその周辺 大串竜一著 東海大学出版会 1992
 祝福から暴力へ 儀礼における歴史とイデオロギー モーリス・ブロック [著] 法政大学出版局 1994 (叢書・ユニベルシタス 434)
 エコロジーの新秩序 樹木、動物、人間 リュック・フェリ [著] 法政大学出版局 1994 (叢書・ユニベルシタス 451)
 夢見の技法 超意識への飛翔 カルロス・カスタネダ著 二見書房 1994
 ジェンダーの日本史 上 脇田晴子、S.B. ハンレー編 東京大学出版会 1994 (上 宗教と民俗 身体と性愛)
 テーマ音楽が流れてきた。タイトルには『深田久弥の日本百名山』そしてテーマ曲の旋律、その上、私が登ったことのある『斜里岳』である。アッ！ 『清岳荘』ここに一泊して山頂を目指したのだ！ もっとテレビのボリュームを上げたい！ 何かし？ 山岳紀行家である深田久弥が昭和39年7月に新潮社から『日本百名山』を刊行した(山小屋文庫所蔵)。彼が本書に載せた北海道から九州まで、百の名山は彼が全部その頂上に立った山々である。この彼が選定し、本書に掲載した全ての山々を映像化してNHK・BS2で放映されていたのである。彼と信望のあった人々、個々の山に所縁のある

ファジィのはなし 向殿政男著 日刊工業新聞社 1989
 学生の快楽・教授の憂鬱・親の溜息 誰のための大学か 犬田充著 中央経済社 1993
 日本語表現法 長野正編著 玉川大学出版部 1994
 同時代人ベンヤミン ハンス・マイヤー 法政大学出版局 1994 (叢書・ウニベルシタス 443)
 道路橋の実用診断学 上巻 高島春生著 現代理工学出版 1988
 道路橋の実用診断学 下巻 高島春生著 現代理工学出版 1988
 ODAと環境・人権 多谷千香子著 有斐閣 1994
 総合エネルギー論入門 ヒトはどこまで生き永らえるか 大野陽朗著 北海道大学図書刊行会 1993
 生体内熱移動現象 横山真太郎著 北海道大学図書刊行会 1993
 森の文明・環境の思想 人類を救う道を探る 梅原猛、安田喜憲編 講談社 1993
 社会保障行政入門 岡光序治編著 有斐閣 1994
 システム工学 エンジニアリングシステムの解析と計画 赤木新介著 共立出版 1992
 はじめてのLotus1-2-3R4J Windows版 遠藤俊徳著 秀和システムトレーディング 1994
 環境工学 石井一郎著 森北出版 1987
 土木へのアプローチ 榎木亨 [ほか] 編著 技報堂出版 1991
 上下水道工学 茂庭竹生著 コロナ社 土木系大学講義シリーズ (14)
 新規準新指針による鋼構造の設計 佐藤邦昭著 [昭和56年] 改訂版 鹿島出版甲会 1981
 メディアラボ「メディアの未来」を創造する超・頭脳集団

の挑戦 スチュアート・ブランド著 福武書店 1989
 建築家会館叢書 建築家会館 1991 素猫・太田和夫 藤原千晴編集事務所編 [マイハウス] 素猫・[マイハウス] 自由
 建築家会館叢書 建築家会館 1992 素猫・松村正恒 宮内嘉久編集事務所編 [Acrisim] 1991 素猫・宮内嘉久
 建設業各社研究開発報文目録 1992 建設業協会研究情報専門委員会編 建設業協会 1993
 [北海道開発局]道路現況調査 平成5年4月1日 北海道開発局建設部編 1993
 [北海道開発局]橋梁、トンネル、立体横断施設現況調査 平成5年4月1日現在 北海道開発局編 1993
 蒸気原動機 谷口博、工藤和彦共著 コロナ社 1989 (機械系大学講義シリーズ 21)
 品質管理の基礎実務 データのまとめ方と使い方 武田正一郎著 技術評価社 1979
 あしあと一字野一族の系譜 一字野真平著 北海公論社 1992
 酸性雨に関する文献調査報告書 酸性雨文獻調査委員会編 建築業協会 1994
 土木工学 1-15、印刷教材 放送大学学園放送教育開発センター制作 放送大学教育振興会 刊行不明 ビデオ15本 (放送大学ビデオ教材)
 土木印刷教材 1 社会資本と土木工学 2 土木の歴史 3 構造物の強さ 4 構造物に作用する外力 5 構造物の設計・施工・管理 6 土と基礎 7 地下空間の利用 8 地盤と災害 9 海岸の自然・利用・保全 10 河川の現象と制御 11 交通施設と運用 12 都市計画と都市施設 13 水の循環 14 都市廃棄物の管理 15 都市環境の改善

人などが彼の足跡を再び踏み、山の感想を述べながら踏破し、山頂に立つ。そして番組の最後にテーマ曲の旋律とともに、放映の『斜里岳』では、『深田久弥は頂上に立ったが、私を迎えたのは濃い霧でしかなかった』とナレーションが流れて番組は終わるのである。

今回、この番組が全20巻でビデオ化され、早速、山小屋文庫で受け入れた。彼の選んだ北海道の山々は、九つの山々で第1巻には、利尻岳・羅臼岳・斜里岳・阿寒岳・大雪山、第2巻には、トムラウシ・十勝岳・幌尻岳・後方羊蹄山が収録されている。様々の山岳写真集などがあるが、これらがビデオ化されたことにより、より臨場感に溢れ、

山の素晴らしさ、そして何時か目指そうあの山へ! そんな思いにさせてくれる貴重なビデオである。閲覧カウンターで申し込み用紙に必要事項を記載して、どうぞ閲覧室3階のA・Vブースでご覧下さい。 一番学歴入生」編著(著) (H.T)



雑誌「山と溪谷」より

インターネット用語集 日本シスシステムズ(株)編著 共立出版 1994
 〈自由(リベルテ)・平等(エガリテ)〉と〈友愛(フラテルニテ)〉 “市民社会; その超克の試みと挫折” 中西洋著 ミネルヴァ書房 1994 (Minerva 人文・社会科学叢書 2)
 微分幾何学講義 初瀬弘平著 共立出版 1993
 テンソル 科学技術のために 石原繁著 裳華房 1991
 ベクトル解析 使える数学 平居孝之、福田亮治著 共立出版 1993
 キーポイントベクトル解析 高木隆司著 岩波書店 (理工系数学のキーポイント 3)
 自然の中の幾何学 みつばちの巣から宇宙論まで V.L.ハンセン著 トップラン 194 (AK ピーターズ・トップラン数理解科学シリーズ 3)
 位相幾何学から射影幾何学へ 幾何学への入門 横田一郎著 現代数学社 1993
 射影平面の幾何学 郡敏昭著 遊星社 1988
 近代日本の百冊を選ぶ 伊東光晴〔ほか〕選 講談社 1994
 (新)学校教育全集 1 ぎょうせい 1994 奥田真丈、熱海則夫編
 新学校教育全集 2 奥田真丈〔ほか〕編 ぎょうせい 1994
 アジアから考える 1 溝口雄三〔ほか〕編 東京大学出版会 1993
 アジアから考える 2 溝口雄三〔ほか〕編 東京大学出版会 1993
 アジアから考える 3 溝口雄三〔ほか〕編 東京大学出版会 1994
 アジアから考える 4 溝口雄三〔ほか〕編 東京大学出版会 1994

海 J. ミシュレ著 藤原書店 1994
 女の皮膚の下 18世紀のある医師とその患者たち B. ドウーテン著 藤原書店 1994
 女の歴史 2 [1] 杉村和子、志賀亭一監訳 藤原書店
 クリスティアーヌ・クラピシュ=ズベール編
 涙の歴史 アンヌ・ヴァンサン=ビュフォー〔著〕 藤原書店 1994
 歴史の白昼夢 フランス革命の18世紀 ロバート・ダーント著 河出書房新社 1994
 利己的な遺伝子 リチャード・ドーキンス〔著〕 紀伊国屋書店 1992 (科学選書 9)
 森と文明 ジョン・バーリン著 晶文社 1994
 ソ連とは何だったか 塩川伸明著 勁草書房 1994
 社会主義とは何だったか 塩川伸明著 勁草書房 1994
 医者と殺人者 ロンブローゾと生来性犯罪者伝説 ピエール・グルモン著 新評論 1992
 中世知識人の肖像 アラン・ド・リベラ 新評論 1994
 歴史家のアトリエ ジョルジュ・デュビユー、ギー・ラルドロワ〔著〕 新評論 1991
 生と死 有馬朗人〔ほか〕著 東京大学出版会 1992
 人間と死体 養老孟司著、日本における死の観念 佐藤正英著、日本神話にみられる生と死 神野志隆光著
 フランス革命の主役たち 臣民から市民へ 上 サイモン・シャーマ著 中央公論社
 フランス革命の主役たち 臣民から市民へ 中 サイモン・シャーマ著 中央公論社 1994
 フランス革命の主役たち 臣民から市民へ 下 サイモン・シャーマ著 中央公論社 1994
 ラカンの世界 佐々木孝次著 弘文堂 1984
 ラカンもしくは小説の視線 赤間啓之著 弘文堂 1988

気楽に読もう

鳥居龍蔵伝

—アジアを走破した人類学者—

中藪英助著 (岩波書店 1995.3)

鳥居龍蔵について語るとき、地球儀の前に立って両手をひろげて語るのがふさわしいと、そう私は思うことがある。廃棄されようとした昭和6年の時事新報の切抜に、ふと鳥居龍蔵の連載寄稿を見たことがある。「if」という標題をもち「もしもベーリング海峡が陸続きであるならば」というもので雄大な民族移動を論述していたと記憶する。

そこにアリューシャン列島があり、それに接続する列島弧千島に鳥居龍蔵は明治32年我国初の人類学的調査を行い、大正8年仏文の「千島アイヌ」を発表している。その緒言で千島アイヌをとりあげたものは皆無に等しい。その空白を私は埋めようと望むとのべ、善良な千島アイヌへの思いやり、やさしさが全編をつらぬいている。緒言の最後にとくに終始支援と好意を寄せられた T. Kono, M. Abe に衷心から感謝したいとのべている。T. Kono は河野常吉であり、M. Abe は阿部正己である。日本の北辺からアジア大陸中央部を駆けた鳥居龍蔵の伝記が世に出たのである。

国連「環境開発」会議と南北間の対立

千原 謙二

小田 清

地球的な規模で進展しつつある環境破壊に警告を發したホールディング「宇宙船地球号の経済学」やローマ・クラブ『成長の限界』に触発されたかのように、1970年代以降、開発と環境問題を討議する国連の「国際会議」が相次いで開かれた。また、1980年代に入り、次のような将来予測も現実味を帯びるようになり、ますます環境問題への対処が重要性を増してきた。

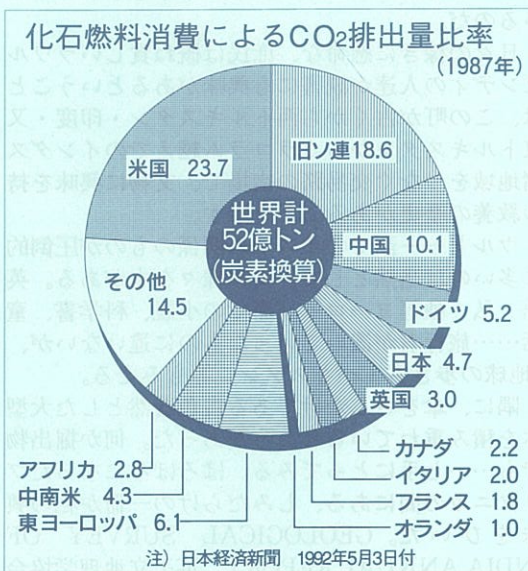
すなわち、それは「今後50年以内に世界の人口は50億人から100億人に急増すると予想され、その大部分は途上国において増加すると考えられる。これらの人々を先進国並みの経済水準に引き上げるためには、今日の世界経済規模で5～10倍、エネルギー消費量で5倍、経済成長率は年率で3～4%を持続する必要があるが、これらがすべて実行に移されるとするならば、明らかに地球環境の許容能力を超える経済活動になる」というものであった。

このような厳しい予測を踏まえた国際会議での一連の討議の中で明瞭となったことは、先進国と発展途上国の「環境」に対する認識の相違であり、対立であった。

そこでの対立点とは次のようなものである。先進工業国の側はすでに高度な経済水準を達成したため、今後は環境保護重視の国際協調政策を優先すべきであると主張する。これに対し、発展途上国の側は、このような政策認識を否定する。すなわち、先進国側が問題としている地球規模での環境破壊は先進国の「浪費社会」が引き起こしたものであり、われわれに責任はない。われわれは貧困問題を解決し、先進国並みの生活水準を享受する権利を有するが、その手段として、先進国と同様に経済発展のために工業化を追求し、エネルギーを使用する。「環境保全」を口実に「開発する権利」を奪うことは先進国といえども許されない。それほど先進国が環境保全問題を強調するならば、発展途上国の生活水準の向上に責任を持ち、

それにふさわしい資金援助を行うべきであるというものである。

このような南北間の考え方の相違に加え、1992年にブラジルで開かれた「地球サミット」では先進国間での利害対立も明らかとなり、地球規模での「環境保全問題」はますます複雑さを増すことになる。すなわち、図に示したように、一部の



先進国や旧社会主義国では環境問題の重視を唱えながらも、現実の経済活動では依然として汚染物質を大量に放出し続けていることへの批判である。このため、環境保全意識の国際的な高まりに反し、なかなか具体的な対策を打ち出せず、その悪化を放置したまま時間だけが経過していつるのである。したがって、今日、われわれにとって必要なことは、国際協調政策の確立よりも、わが国を含めた先進国で依然として続いている「大量生産・消費・廃棄」の経済システムをどうするのかの観点とその転換への試みである。

(こだ きよし 経済学部教授・開発政策論)

パキスタン本紀行

～ラワルピンディの本市からペシャワールの本屋へ～

著者 田中 小

コーニッシュ 篁子

夏の陽がモスクのミナレットに差しかり少し影を作っていたが、路上の片側を200m程も占める本市は、無雑作に広げた幾組もの5×10m方形のゴザの上に本を並べて直射日光を浴びていた。テント屋根を張ってあるものもあるが、北ヒマラヤおろしの風と、舗装なしの道から捲き上がる埃りが遠慮なく古本にも新本にも舞い落ちている。そんな中で人々はゴザの合間をめぐり歩き、あるいは蹲んだり立膝したりして本を手にとっているのだ。

日々の稼ぎに懸命な、庶民は概ね貧しいラワルピンディの人達が読書にも興味があるということは、この町が古くから西トルキスタン・印度・又東トルキスタンからカラコラム越えでのインダス諸地域をつなぐ交易路の宿場で、文物に興味を持つ教養の歴史があることを示す。

ウルドゥー語でのイスラム関係のものが圧倒的に多いのは当然として、実に様々な本がある。英語・仏・独等ヨーロッパ語での小説、科学書、童話……旅行者が置いていったものに違いないが、「地球の歩き方・パキスタン」等もみえる。

隅に、傘をさしかけてある古色蒼然とした大型本を積み重ねているところがあった。何か掘出物でも……と手にとってみる。ぼろぼろになったブリタニカの間にある、しみだらけの一冊が私の興味をひいた。GEOLOGICAL SURVEY OF INDIA ANNUAL REPORT、英王立地理学協会が出している英領旧印度時代の官本である。紙質が弱って崩れでもしてはいけないと用心してページをめくったが、これが案外しっかりしていて、精緻なペン先での地層図やトポグラフィー等書き込みの細かさは素人にも感動を呼びおこさせる程だ。ぎっちりと全印度の地理報告がしてある。一九〇三年の発行だ。西北パキスタンのこの地はその頃、英領印度の一角であった。熱心に見入っている自分の背中に、私は視線を感じていた。この積重ね本の持主に違いない。「気に入ったのか」と聞いて来た。簡単に欲しいことを認めると高値をつけられるから、「いやあ、とも角古過ぎる。表紙は剥げた上反っちゃってるし、中も黄ばんでしまっ」と素気なく言う。「ちょっと」私からひったくるようにして男は今度は私に背を向けた。急いでにわた値を書きつけているのだ。「2千

ルピーだよ。」法外でない限り、騙されていると判っていても、私は貧しい国の人のものをねぎり買いたくないことにしているがこれは一寸ひどい。問答しているうちに半分になったので、鴨の私はそれを求めた。

次の週更に西北のペシャワールまで、乗合いバスに揺られて行った。ガンダーラ研究資料でリュックは少し重くなっている、熟年の足もとがふらついた。陽は灼りついていた。

ペシャワールは、アレクサンダー大王も、オリエント遠征で陣を張った町である。その9百年程後、7世紀には中国の求法僧玄奘が、仏法の行われた様子を都の立たずまいと共に大唐西域記に記している。

今のペシャワールは、拳銃を持った警備兵が鋭い眼を光らせ所処に立つ国境街（アフガニスタンとの）の趣きだ。

遠い古の代、仏教がこの一帯に盛んだった。古蹟から出る碑や、仏像彫刻の足もとなどに彫りつけてある文字がある。カロシュティ文字である。解説は先学者が明快にやってくれているし、大英博物館には沢山の資料がある。しかし、私は現地で自分で読んでみたいとの秘かな野心があった。ペシャワールの本屋の旦那に問い合わせてみた。「カロシュティねえ。僕は学者でね、大体ここいらから出てくる字は何でも読めるんだが……ギリシャ語、ペルシャ語、パシュトー語、アフワン語」とひげをしごく。ペシャワールから北東50kmの処に印度アショカ王が立てた一連の碑があってそれにはふんだんに当の文字が彫りつけてある。2千数百年の風雨に耐えた盤石の法柱である。「ウルドゥー語との対訳を持ってたんだがなあ。何？ウルドゥー語は読めない？」じゃ僕が英語に訳してやる。ちょっと待ってね」他の客はそっちのけでそのパターン人（ペシャワールからアフガニスタンにかけて住む誇り高い民族）の店主は奥の方でそれを探すのだった。どこにも奇特な人というのは居るものだ。時間が無いので彼の親切を辞した後、宿に戻って私はパキスタン風に布張りの小包みを作り、幾冊かの大切な本達をロンドンに送るべく郵便局へ向かった。

（コーニッシュ せつこ 人文学部講師・英国文化論）

■ アフリカの人々が教えてくれたこと ■

細見真也

西アフリカのガーナ大学へ客員研究員として赴任したのは、今からちょうど33年まえの1962年10月であった。大学のキャンパス内ではともかく、首都のアクラ市内や郊外の農村をドライブすると、子供はもとより大人まで私の方をユビ指しながら「チャイニーズ!」「チャイニーズ!」と大きな声で叫ぶのが常で、誰ひとりとして「ジャパニーズ!」と呼ぶ者はいなかった。

私たち日本人がアフリカ人に会っても、見ただけでは彼(または彼女)がケニア人なのか、ナイジェリア人なのか、それともガーナ人なのかほとんど区別できない。同じように、ガーナ人が一人の東洋人である私を見ただけでそれが中国人なのか、朝鮮人なのか、あるいは日本人なのかを区別できないとしても不思議ではない。そのようなことは、相手の側に立って冷静に考えれば、容易に納得できたはずである。

ところが、当時の私には、ガーナ人が「チャイニーズ!」と呼ぶのを黙って聞き流すだけの余裕がなかっただけでなく、逆に「自分は文明国の日本から来た文明人である!」と憤慨し、それをガーナ人に教えてやろうという激情に駆られ、デパートで買い求めた画用紙に「JAPAN」と書いたり「日の丸」を描き、それを愛車フォルクスワーゲン

愛車 フォルクスワーゲン



ガーナ国旗

のドアやボンネットに貼り付けて、ガーナの農村を走りまわったのである。

それでは、当時の農村地方の住民たちは、「JAPAN」という文字の意味まで読解したり、白地に赤丸を描いた画用紙を「日の丸」という日本の国旗として正確に認識することができたと考えてもよいのだろうか。この点についても、例えば、農村児童の就学率や成人の識字率が20~30%程度であり、小中学校の中途退学者の比率が30~40%にのぼり、そのうえ、成人の識字能力といっても自分の名前を読み書きできるに過ぎないことを考えれば、私の「努力」が独善的で独りよがりな愚行であったのは明白である。重要なことは、この場合もまた私が自分の行為をガーナ人の側に立って客観的かつ冷静に見つめることができなかった、という点である。

この場合、相手の側に立つためには、「自分ならこうするだろう」と相手の行為を予想したり想像しなければならず、そのための前提として、たとえ異民族とか異人種の場合でも肌の色や言葉とか風俗・習慣の違いを超えて、相手を自分と同じ人間と見なす普遍的な人間観が必要不可欠である。

このように考えると、28歳にもなっていないながら、当時の私は普遍的な人間観を持っていただけでなく、逆に日本民族こそ世界で最も優秀な民族だといった根拠のない民族的な優越感やエスノセントリズムにとらわれていたと言うほかない。私が世界の中でも最も非人間的な扱いを受けてきたアフリカの人々の「人間として生きる知恵」を発掘し、学生諸君にも人間としてのすばらしさを伝えようとしてきたのも、彼らに普遍的な人間観を育てたいとねがうゆえである。

(ほそみ しんや 教養部教授・国際事情)

ウッズホールに集う世界の頭脳

竹内 潔

ボストンから、車で2時間ほど南東に走ると、“Cape Cod”に入る。毎年、夏になると、世界の研究者達が、この岬の、ある小さな町の周辺に集結するのである。その“Cape Cod”の付け根にある小さな町、ウッズホール。それは生物学を志したのものには、学問の聖地であり、実に憧れの場所である。

この町は、1888年に設立されたウッズホール海洋生物学研究所(MBL)を中心に、町全体が様々な研究施設から構成されている。当時、設立にあたっては、アメリカの良識を代表する科学者達が、生物学、基礎科学、および自国の文化の発展のために結集し、その中の幾人かの名を冠したいくつかの研究棟を提供することから出発した。当地で通年研究を続けている研究者もいるが、多くは夏の数カ月の間に集中している。設立当初より、研究と教育が2本の柱となっているこの研究所の様々なシステムは、非常にユニークである。そのなかでも、図書館の貸出はすべて個人の責任で行い、年中、世界中の人が自由に入出入りできる。この図書館の壁に、墨で書かれた一枚の額縁がある。団勝磨、日本の発生生物学の父ともいえる彼が、記したものである。1945年、日本が敗戦を迎え、進駐軍が東大の三崎臨海実験所に向かったことを知ったとき、その実験所で研究していた彼は、進駐してきた若いアメリカの兵士へ、「平和な研究を続けている日本の学問の聖地であるこの場所を破壊することはしないでほしい。アメリカのウッズホールを思い出してくれ。」と、英語で記したものである。この文章を持ち帰った、若いアメリカの兵士が、「日本の良心を見たような気がする。」と大事に持ち帰ったのが本当にうれしい。

昭和天皇も訪れたというこの地で、多くの研究者と出会った。日本の生物学、医学、生理学の分野で伝説の日本人として語られている、田崎先生ご夫妻にお会い出来たのは、じつに幸運であった。現在ワシントンのNIHで、神経細胞を使い、生理学の仕事をしている先生は、日本の敗戦後まもなくアメリカに渡り、その後研究を続け“世界の

田崎”とまでいわれるまでの苦労は筆舌に尽くせないものであったと、想像できる。日本で発表出来ないでいた論文をアメリカ軍の潜水艦に託して、何時か衆目の目に止まるように配慮を請った、という話には、研究者の良心と自らの信念に鬼気迫るものさえ感じることが出来た。田崎先生は、近づき難い、本当に怖い先生であった。田崎夫人は、先生にとって常に一番信頼のおけるテクニシャンであり、また先生の研究の一番の理解者でもあった。二人のチームワークは、端から見ても、ピリピリするほど張り詰めたものがあり、日本人としてアメリカの地で本物を追及し続けた長い年月が偲ばれた。

ウッズホール アンドレの別荘にて 1992年夏



左からアンドレ夫人、アンドレセントジョルジ、森本博士、マサチューセッツ州立大学学生、シカゴ大学事務長（アンドレの兄）

ノーベル賞学者も数多くこの地に集まるのだが、そのなかでも、90歳の当時、悠々と余生を過ごしていたのが故セントジョルジ(1893-1986年)であった。ビタミンCの研究で1937年にノーベル賞に輝いた、このハンガリー人は、ウッズホールに自宅を構え、毎日数時間は、研究室で過ごしていた。普段は、面会不可能であったが、甥のアンドレ・セントジョルジと知り合いだったので、会うことが出来た。その後、1992年の夏にアンドレの夏の別荘を北海学園の森本博士とウッズ・ホールに訪ね、彼等と国際的な学術交流を持った。

(続く)

(たけうち きよし 人文学部教授・現代科学論)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.17 No.2 (通巻134号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011) 841-1161 本館内線 270-275・279 工学部内線 813・814 印刷所: 翰アイワード